

# 奈良・平安時代を主体とする下総国東部の鉄生産遺跡

糸 川 道 行

## 目 次

はじめに .....	611
1 鉄生産遺跡の様相 .....	612
(1) 対象遺跡の郡郷比定と立地 .....	612
(2) 下総国埴生郡・下総国印播郡・上総国武射郡およびそれ以前の時期の鉄生産遺跡 .....	615
(3) 下総国香取郡の鉄生産遺跡 .....	618
(4) 下総国匝瑳郡の鉄生産遺跡 .....	618
(5) 下総国海上郡の鉄生産遺跡 .....	619
2 下総国東部およびその周辺の鉄生産遺跡の歴史的意義 .....	620
(1) 操業年代 .....	620
(2) 鉄生産遺跡の造営主体と生産物運搬ルート .....	621
(3) 下総国東部周辺の鉄生産遺跡群の歴史的意義 .....	626
おわりに .....	629

## はじめに

筆者は奈良・平安時代における下総国の集落研究の一環として、匝瑳郡・海上郡・香取郡を対象に研究を続けてきた。これらは下総国東部に位置する郡であり、本稿では東総三郡とする。なお単に東総と記述する場合、これらの一郡以上を指す。『和名類聚抄』(以下『和名抄』)は平安時代中期に源順が編さんした事典といえる書物である。筆者はまず『和名抄』にみえる東総三郡の各郷について比定地を検討し、東総地域の奈良・平安時代遺跡の所属郷を想定した(糸川2020)。次にその比定に基づき、東総における奈良・平安時代の交通(糸川2021a)や、東総三郡各郷の郡郷間の関係、郡家の比定地、主要集落等について述べた(糸川2021b、糸川2022)。

その続きとして生産に着目したが、本稿はそのうちの鉄生産遺跡をあつかったものである。テーマの関係上、東総三郡だけでなく、埴生郡・印旛郡、上総国武射郡の遺跡もとりあげた。なかでも埴生郡の比重が大きくなった。本稿の目的はこれらの地域に存在する鉄生産遺跡の歴史的意義を述べることである。

千葉県東部における飛鳥時代から平安時代の鉄生産遺跡については、これまで成田空港周辺の遺跡群の調査が大きな成果をあげている。筆者はそれらの遺跡群については主として下総国埴生郡山方郷(里)およびそれ以前の領域内に位置すると考えている<sup>1)</sup>。本稿では、それらに加えて東総三郡に所在する鉄生産遺跡をとりあげる。

東総三郡の鉄生産遺跡・関連遺跡は未調査のものが多く、それらは操業時期が不明である。製錬関係で調査された遺跡は九美上製鉄遺跡のみであり、操業時期の一端として9世紀代が想定されている。また長津台2号遺跡では炉壁材が出土している。伴出遺物から10世紀代の操業が想定されている。名木鎌部製鉄遺跡は調査がされていないが、近隣に所在する名木鎌部廃寺との関係から8世紀後半代の操業を想定できる。

東国の製鉄は奈良・平安時代に盛行する。しかし中世では中国山地の製鉄が隆盛になっていくことや、東国産砂鉄のチタン濃度が高いことが経済的に不利であることなどの理由により、東国の製鉄は奈良・平安時代よりも衰退することが考察されている(福田1995・福田2000)。

ただし鉄滓の分析をしていない場合は、たとえ調査されていても製鉄遺跡と製鋼(精錬)遺跡の区別が難しいことも指摘されている(佐藤1996)。しかし東国での製鉄の主体は中世よりも古代であったとみる。その理由の1番目は、古代においては中国山地などの鉄生産が日本全体の鉄素材需要をまかなえるほど成熟していないことにある。2番目として、古代におけるそのような状況下でも開発の進展等にもない東国の鉄製品の需要が増大したことをあげる。そして3番目として、地域的な偏りはあるが東北経略等にもない武器や、鍋等の鋳造品が必要になったことをあげる。以上の諸事情により、奈良・平安時代の東国においては生産効率が悪い条件下でも製鉄を行う必要があった。

中世の東国においても製鋼は行われており、小鍛冶も普遍的であるが、製錬を行う本格的な鉄生産遺跡は東北日本全体をみわたしても非常に少ない<sup>2)</sup>。製錬はなんらかの事情がない限り実施されないと考える。

したがって東総三郡に所在する未調査の鉄生産遺跡においても、ほぼ奈良・平安時代のものであり、遅くとも10世紀には操業が開始されていたとみる。

奈良・平安時代の鉄生産遺跡では、製錬から鍛造まで一貫して行われている場合があるため、本稿で鉄生産という場合は製錬・製鋼・鍛冶・鋳造のすべてを含める。ただし、小鍛冶炉をもつ遺跡は多くの集落

遺跡に存在する。筆者にはそのような遺跡のすべてを把握することができず、管見に触れたものだけを取りあげる。

なお本稿は鉄生産を主導した経営主体について述べるものである。よりわかりやすくいえば鉄を造らせたのは誰かということである。鉄生産の技術的な様相も重要であるが、筆者の力量不足によりそれについてはほとんど触れていない。

鉄生産遺跡については山方郷（里）のものを除けば調査された事例が少ないため資料不足である。憶測の域を出ない点が多々あるが、下総国東部における様相に触れることによって下総国の奈良・平安時代集落研究の一助にする。

## 1 鉄生産遺跡の様相（第1・2図、第1表）

### （1）対象遺跡の郡郷比定と立地

対象遺跡の位置については第1図に記入したが、旭市のうち旧干潟町鑄木周辺の遺跡は狭い範囲に多く存在するため、第2図に掲載した。遺跡が所在する現・旧の市町、古代における郡郷比定については第1表に記載した。また遺跡の立地や検出遺構・時期なども第1表の概要に記載した。本文では複数にまたがる遺跡の記述や、長文になるなど表にしきれないことを記す。なお対象の時期は飛鳥～平安時代である。弥生時代終末～古墳時代後期前半、中近世については対象としない。また文献欄の千文セは千葉県文化財センター、香文セは香取郡市文化財センターを略したものである。

まず対象遺跡であるが、上記のように現代の成田空港周辺に一つの集中箇所がある。これはほぼ下総国埴生郡山方郷（里および里以前）周辺の遺跡群である。芝山町に所在する遺跡は、上総国武射郡加毛郷・理倉郷およびそれ以前の評里制・武社国段階のものである。これらは山方郷（里および里以前）の遺跡群とのかかわりが深い。成田市北囲護台遺跡は芝山町の一部の遺跡同様に古く、時期は埴生・印播分割以前である印波国段階の可能性もある。

旧干潟町に多く存在する鉄生産遺跡は筆者が想定する迺瑳郡珠浦郷・日部郷内の遺跡で、とくに珠浦郷に多い。香取市のうち旧栗源町にもまとまってみられる。迺瑳郡田部郷に比定する地域であり、田部郷の東西に分布する。

成田市のうち旧大栄町内にも鉄生産遺跡が集中する。それらは香取郡「真敷郷」内に位置する遺跡群であるが、表では「真敷郷」または不明とした。真敷駅は延暦二十四年（805）に廃止される。ほぼ8世紀代に真敷駅を経営する駅戸集落群が存在するとみるので、筆者は吉田東伍の説を継承して「真敷郷」を想定する<sup>3)</sup>。しかし後に編纂された『和名抄』には駅家郷（真敷郷）がないことから、「真敷郷」が存在したとしても9世紀初頭のうちには消滅したとみる。鉄生産の操業開始が9世紀代であった場合、すでに「真敷郷」は廃止されていることになる。その場合かつての「真敷郷」地域の所属郷が不明瞭であり、あるいはどこの郷にも属さないのかもしれない。不明としたのはこのような理由からである。

鉄生産遺跡は東庄町・銚子市周辺にもみられる。古代では海上郡橘川郷・石田郷・石井郷・三前郷などに比定できる地域である。迺瑳郡や香取郡も同様であるが、とくに海上郡内には未知の鉄生産遺跡が多く埋もれていると想定する。

成田市の東部、野毛平や長田にも鉄生産遺跡が存在する。香取郡詔草郷内の遺跡である<sup>4)</sup>。名木鎌部製鉄遺跡は近隣に名木鎌部廃寺が存在する。香取郡健田郷内の遺跡である。九美上製鉄遺跡は香取郡大槻郷



- 鉄生産遺跡
- 奈良・平安時代の遺跡

第1図 下総国東部およびその周辺における鉄生産遺跡の分布

内に所在するが、匝瑳郡田部郷東部にも近い位置である。

一部の遺跡の立地について、第1表を補足する。まず山方郷（里）の主要遺跡である取香和田戸遺跡・東峰御幸畑西遺跡・一畝田甚兵衛山北遺跡は、香取のうみ水系と太平洋に注ぐ河川の水系の分水界に立地する。交通の面からはいずれも取香川による水上交通がもっとも重要と考える。取香川は香取のうみに注ぐ根木名川の支流である。鉄生産物など重量物の運搬については、たとえ小河川であっても小舟を使用した水上交通が盛んであった。集落と水上交通との関係は印播郡村神郷や船穂郷などでもうかがえる。なお下総国東部に存在する河川については、現在では水量の調節等を受けている場合がある。しかし本稿では椿海を除いて水路そのものについては古代から大きな流路変更がないという前提で記述する。

取香川北方の尾羽根川も根木名川支流である。東峰御幸畑西遺跡は、尾羽根川の方が取香川よりも近い。山方郷周辺の鉄生産遺跡群については尾羽根川の利用もあったと考えるが、埴生郡家周辺との関係においては、取香川の利用がもっとも活発であったとみる。また取香川の方が尾羽根川よりも幅が広いまま台地奥部まで入り込んでおり、この点も取香川の方が優位である。一畝田甚兵衛山北遺跡は尾羽根川支谷と、太平洋に注ぐ栗山川支流の高谷川支谷の双方に近く、取香川の利用と合わせて複数の水上交通路を想定する。



第2図 旭市鎬木周辺の鉄生産遺跡群 (S=1:20,000)  
(戸村2001 文献より改図・転載)

香山新田中横堀遺跡・金沢台遺跡・間程台遺跡は高谷川源流・上流部に立地するが、高谷川源流の支谷と取香川源流の支谷間は500mに満たない至近の位置関係である。これらも高谷川と取香川の双方を利用した水上交通を想定できる。

次に、旧干潟町内の鉄生産遺跡群について述べる。まず筆者が珠浦郷内とした旭市鎬木周辺に所在する鉄生産遺跡群の立地をみる。いくつかの遺跡は椿海側の斜面に立地する(第1表No.39・41・42)。しかし、それらよりも椿海北方にある常磐川の南北に位置する遺跡が多い(31~38)。常磐川は栗山川の支流で、多古町南玉造付近で栗山川から分岐し、東方に長く延びる河川である。旧干潟町鎬木周辺の遺跡群のなかには筆者が珠浦郷の郷家集落とみる長津台2号遺跡もある。その掘立柱建物等の建物群は台地の南端に位置し、南方の常磐川とは近い位置関係である。

常磐川周辺の遺跡群は椿海からは

台地を隔てた北方の台地上・斜面に立地する。椿海の増水時に水害を受けないことが考慮された可能性があるが、それよりも常磐川による水上交通が重視されたとみる。なお常磐川の谷部に面していない長熊2号製鉄遺跡(40)は椿海側の低地に対して舌状に延びる台地一つを隔てた立地である。風向き・炭用の木材入手のほかに椿海の影響を考慮した可能性がある。

## (2) 下総国埴生郡・下総国印播郡・上総国武射郡およびそれ以前の時期の鉄生産遺跡(第1表No.1~13)

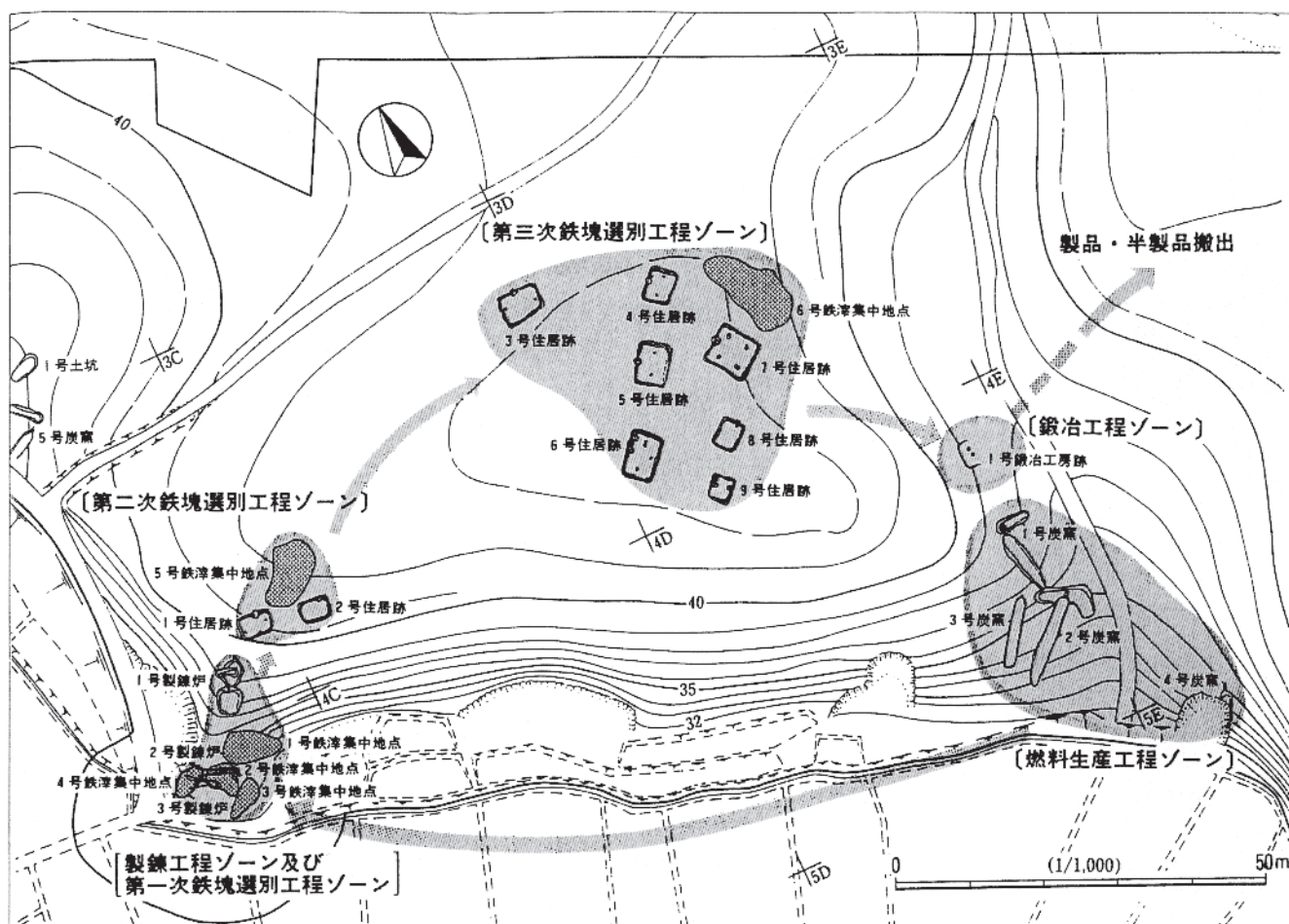
本項から(5)までは原則として筆者が想定する古代の郡郷(それ以前を含む)単位で記述する。本項は現在の成田空港周辺の鉄生産遺跡群を含む。それらについてはこれまでに西川博孝や新田浩三などの諸氏が考察を行っている(西川1982、新田1998など)。本稿ではとくに新田の考察を参考とした。各遺跡の様相について以下、第1表におさまらないことを述べる。

### ○一鉄田甚兵衛山北遺跡

新田は本遺跡の鉄生産工程を以下のように復元した(第3図)。

- ①燃料生産工程ゾーン(炭窯) ②製錬工程ゾーンおよび第一次鉄塊選別工程ゾーン(製錬炉・鉄滓集中地点)
- ③第二次鉄塊選別工程ゾーン(竪穴建物(工房)・鉄滓集中地点) ④第三次鉄塊選別工程ゾーン(竪穴建物(工房)・鉄滓集中地点)
- ⑤鍛冶工程ゾーン(鍛冶工房)

鍛冶工房では精錬鍛冶または鍛錬鍛冶が行われ、半製品・製品が他所へ搬出された。



第3図 一鉄田甚兵衛山北遺跡の鉄生産工程(新田1998文献から転載)

奈良・平安時代を主体とする下総国東部の鉄生産遺跡

第1表 下総国東部およびその周辺における鉄生産遺跡等の概要

No.	遺跡	市町		古代の国郡郷	概要	文献
		現	旧			
1	取香和田戸遺跡 (空港No60遺跡)	成田市	成田市	下総国埴生郡山方郷(里)	・根木名川支流、取香川上流と栗山川支流、高谷川上流の分水界・J地点 斜面 製鉄炉2基(横置形式箱形炉2基)、小型炭窯5基 台地上 竪穴建物6棟(以上) 鉄塊を竪穴建物で選別 8世紀第1～2四半期・J地点 斜面 製鉄炉1基、大型炭窯8基、テラス状遺構2か所(以上) L地点 台地上 竪穴建物4棟 砂鉄多量 以上9世紀第2四半期	新田1993
2	東峰御幸畑西遺跡 (空港No61遺跡)	成田市	成田市	下総国埴生郡山方郷(里)	・取香川上流と高谷川上流の分水界・製鉄炉8基(縦置形式箱形炉3基 8世紀前半)、炭窯6基、竪穴建物(工房)4棟など 操業開始時期は8世紀前半 製鉄炉と炭窯は斜面、竪穴建物と鉄滓集中地点は台地上に立地	麻生・永塚ほか2000
3	一銀田基兵衛山北遺跡 (空港No11遺跡)	多古町	—	下総国埴生郡山方郷(里)	・根木名川支流、尾羽根川上流と高谷川上流の分水界・製鉄炉3基(横置形式箱形炉2基、縦型炉1基)、炭窯11基、竪穴建物10棟、鍛冶工房1棟、鉄滓集中地点6か所 8世紀第1～2四半期	小久貴、新田ほか1995
4	香山新田中横畑遺跡 (空港No7遺跡)	芝山町	—	上総国武射郡加毛郷	・高谷川の源流部、取香川の源流部・製鉄炉1基、炉壁集中地点3か所、鉄滓集中地点3か所、炭窯3基、炭置場3か所、粘土採掘坑1基 時期は10世紀?～13世紀?でほかの遺跡よりも後出	新田ほか1993
5	金沢台遺跡	芝山町	—	(後の)上総国武射郡加毛郷	・高谷川上流部・鉄生産関係遺構(土坑・平場遺構) 鉄滓 7世紀後半(出土土器から)・製鉄炉は未検出だが箱型炉と想定	
6	間程台遺跡	芝山町	—	(後の)上総国武射郡加毛郷	・高谷川上流部・炭窯1基・製鉄炉は未検出	
7	岩山中袋遺跡 (空港No2遺跡)	芝山町	—	後の上総国武射郡理倉郷	・高谷川上流部・鍛冶工房3棟、竪穴建物18棟、竪穴2基、土坑17基、焼土土坑1基 多くの竪穴建物から鉄塊系遺物が出土 建物内で鉄塊の分離、選別 7世紀後半・製鉄炉は未検出	小林ほか1997
8	沖ノ台I遺跡、II遺跡	芝山町	—	後の上総国武射郡理倉郷	・高谷川上流、木戸川上流間・I遺跡は鍛冶工房1棟、竪穴建物4棟・II遺跡は粘土採掘坑1基、炭窯2基、炭置場2か所、土坑2基・ともに7世紀後半・I遺跡の集落は土器様相から6世紀代を含む・製鉄炉は未検出	西口・豊田ほか2001
9	畑ヶ田花山遺跡、畑ヶ田新林遺跡	成田市	成田市	下総国埴生郡山方郷	・根木名川上流部・花山遺跡は竪穴建物33棟、掘立柱建物1棟 竪穴建物中に小鍛冶炉と鉄滓廃棄坑をもつ鍛冶工房1棟・新林遺跡は竪穴建物8棟・両遺跡とも全体に多量の鉄滓・奈良時代前半から平安時代初頭・製鉄炉未検出	田形・海老原ほか1998、田形1998
10	川栗渡佐間遺跡	成田市	成田市	下総国埴生郡山方郷	・根木名川右岸・斜面地から多量の鉄滓・近接地で8～9世紀に精錬・鍛錬遺構	喜多2001
11	小菅法華塚II遺跡	成田市	成田市	下総国埴生郡山方郷	・取香川左岸・竪穴建物6棟(古墳後期～平安) 多量の鉄滓・鉄生産遺構は未検出	鈴木ほか1995
12	駒井野荒迫遺跡	成田市	成田市	下総国埴生郡山方郷	・取香川左岸・竪穴建物20棟(古墳後期～平安) 小鍛冶遺構をもつ竪穴建物1棟、炭置場1基(奈良・平安)	西口2003
13	北園護台遺跡	成田市	成田市	後の下総国印旛郡八代郷	・根木名川支流の小橋川上流部・竪穴建物45棟、掘立柱建物7棟、大型円形土坑3基(古墳後期～平安) 鉄生産遺構は鍛冶工房1基(工房内に2基の鍛冶炉、1基は精錬鍛冶炉、ほかの1基は鍛錬鍛冶炉)、木炭土坑1基(以上か) 時期は7世紀第3四半期～第4四半期前半で、飛鳥時代以降の鉄生産遺跡としては東国最古級・鍛冶原料鉄は砂鉄由来と鉄鉱石由来・北側の竪穴建物群は工人集落 鍛冶関連遺物が多く出土・製鉄炉は未検出	小牧・阿部ほか1998
14	野毛平木戸下遺跡	成田市	成田市	下総国香取郡詔草郷	・取香川支谷の緩斜面、台地上・印文セ調査分 鉄生産遺構は製鉄炉2基、炭窯2基、竪穴建物1棟、炭置場1基、掘立柱建物1棟 9世紀後半～10世紀 製鉄炉は半地下式型炉 台地上の掘立柱建物は台地整形、竪穴をもつ鍛冶工房・千文セ調査分 竪穴建物18棟 9世紀代 鉄滓や鞆羽口片・鍛冶遺構は未検出	喜多1990、金丸1990、阿部1998
15	長田舟久保遺跡	成田市	成田市	下総国香取郡詔草郷	・取香川支谷の緩斜面、台地上・竪穴建物2棟(O12、O13)、掘立柱建物1棟 O12から多量の鉄滓 8世紀後半からの鉄生産、下限は不明・鉄生産遺構は未検出	喜多1990
16	名木鎌部製鉄遺跡	成田市	下総町	下総国香取郡健田郷	・香取のうみに注ぐ浄光川の支谷の南西斜面・工事により製鉄炉発見・未調査 製鉄炉の基数不明 炉は複数か	沼澤1983、沼澤1998
17	猿田遺跡	成田市	大柴町	下総国香取郡「真敷郷」/不明	・香取のうみに注ぐ大須賀川左岸の支谷斜面・鉄滓塊鉄・製鉄炉は未検出	黒沢2008
18	タラカイII遺跡	成田市	大柴町	下総国香取郡「真敷郷」/不明	・大須賀川上流の台地、南斜面・製鉄炉3基、製鉄関連遺構2基 台地南側縁辺から斜面にかけて、鉄滓が広く散布	戸村1999
19	天神山遺跡	成田市	大柴町	下総国香取郡「真敷郷」/不明	・大須賀川水系の斜面、荒蕪地・鉄滓・未調査	千文セ1998
20	イノフカイ遺跡	成田市	大柴町	下総国香取郡「真敷郷」/不明	・大須賀川水系の斜面、荒蕪地・鉄滓・未調査	千文セ1998
21	大塚山遺跡	成田市	大柴町	下総国香取郡「真敷郷」/不明	・大須賀川水系の斜面、荒蕪地・鉄滓・未調査	千文セ1998
22	辰巳ヶ入遺跡	成田市	大柴町	下総国香取郡「真敷郷」/不明or詔草郷	・尾羽根川を西に臨む台地上、斜面・鉄滓 [千文セ1998]では大須賀川水系	千文セ1998、新田ほか2019
23	下小野製鉄遺跡	香取市	佐原市	下総国香取郡香取郷	・香取のうみに注ぐ小野川水系の台地上・未調査	千文セ1998
24	九美上製鉄遺跡	香取市	佐原市	下総国香取郡大槻郷	・栗山川上流の北岸台地、南斜面・製鉄炉4基、竪穴建物8棟のうち1棟が鍛冶工房、鉄滓集中地点1か所・竪穴建物から鉄滓・集落の主体時期は9世紀だが、鉄生産開始は8世紀後半か	荒井2010
25	橋穴製鉄遺跡	香取市	栗源町	下総国近江郡田部郷	・栗山川上流東方の支谷南斜面・小字に多田良田・未調査	千文セ1998
26	カナクノ製鉄遺跡	香取市	栗源町	下総国近江郡田部郷	・栗山川上流西方の支谷南斜面・炉壁、鉄滓、土器器・詳細な時期不明・沢カナクノI遺跡とも呼称・一部消滅	千文セ1998
27	沢カナクノII遺跡	香取市	栗源町	下総国近江郡田部郷	・栗山川上流西方の支谷南斜面・鉄滓・未調査	千文セ1998
28	ツネヤ遺跡	香取市	栗源町	下総国近江郡田部郷	・栗山川上流西方の支谷南斜面・鉄滓・未調査	千文セ1998
29	猪穴製鉄遺跡	香取市	栗源町	下総国近江郡田部郷	・栗山川上流西方の支谷南斜面・鉄滓・未調査	千文セ1998
30	平山台遺跡	香取市	栗源町	下総国近江郡田部郷	・栗山川上流西方、支流北側の三倉川と南側の徳田川にはさまれた台地・鍛冶炉1基が台地中央部に位置・7世紀中葉から8世紀第3四半期の集落 8世紀代主体 竪穴建物24棟(奈良・平安時代21棟) 掘立柱建物4棟	大賀1987
31	長津台2号遺跡	旭市	千潟町	下総国近江郡珠浦郷	・常磐川上流の台地上・第4次調査 1号竪穴建物から鉄滓、製鉄炉壁材 廃絶時期は10世紀後半～11世紀前半・掘立柱建物9棟(第4次分) 9世紀後半前後	本多2014
32	後田製鉄遺跡	旭市	千潟町	下総国近江郡珠浦郷	・栗山川支流、常磐川支谷の南斜面・鉄滓・未調査・一部消滅	千文セ1998
33	離山瓦窯製鉄遺跡	旭市	千潟町	下総国近江郡珠浦郷	・常磐川支谷の南斜面・鉄滓、瓦、鞆羽口・一部消滅	千文セ1998
34	猪草野1号製鉄遺跡	旭市	千潟町	下総国近江郡珠浦郷	・常磐川支谷の南斜面・鉄滓・未調査・一部消滅	千文セ1998
35	保保示戸1号製鉄遺跡	旭市	千潟町	下総国近江郡珠浦郷	・常磐川支谷の南斜面・鉄滓・未調査・一部消滅	千文セ1998
36	保保示戸2号製鉄遺跡	旭市	千潟町	下総国近江郡珠浦郷	・常磐川支谷の南斜面・鉄滓・未調査・一部消滅	千文セ1998
37	金草製鉄遺跡	旭市	千潟町	下総国近江郡珠浦郷	・常磐川支谷の西斜面・鉄滓・未調査・一部消滅	千文セ1998
38	長津製鉄遺跡	旭市	千潟町	下総国近江郡珠浦郷	・常磐川支谷の西斜面・鉄滓・未調査・一部消滅	千文セ1998
39	長熊1号製鉄遺跡	旭市	千潟町	下総国近江郡珠浦郷	・梅海支谷の南斜面・鉄滓・未調査	千文セ1998
40	長熊2号製鉄遺跡	旭市	千潟町	下総国近江郡珠浦郷	・梅海支谷の南斜面ただし梅海との間に台地が存在し、氾濫を受けにくいところに立地・鉄滓・未調査	千文セ1998
41	行屋製鉄遺跡	旭市	千潟町	下総国近江郡珠浦郷	・梅海支谷の南斜面・鉄滓・未調査・消滅	千文セ1998
42	八谷田製鉄遺跡	旭市	千潟町	下総国近江郡珠浦郷	・常磐川支谷の南斜面・鉄滓・未調査・一部消滅	千文セ1998
43	桜井釜山台遺跡 (千瀬桜井遺跡)	旭市	千潟町	下総国近江郡日部郷	・梅海低地の支谷にほぼ囲まれた台地上、斜面・南斜面から精錬炉1基(以上)、竪穴建物27棟うち2棟が小鍛冶遺構	倉田1975・1976
44	桜井平遺跡	旭市	千潟町	下総国近江郡日部郷	・梅海低地、支谷を臨む台地・竪穴建物4棟、鍛冶炉2基、鍛冶炉は単独だが本来は竪穴建物内に存在か 18号鍛冶炉から炉壁材、炉内滓、鍛造剥片 19号鍛冶炉は鉄滓等の塊が集積 鍛冶炉の時期は9世紀代以降・集落は8世紀後半～9世紀中葉	蜂屋1998
45	大鯉遺跡	多古町	—	下総国近江郡中村郷	・栗山川中流左岸・鍛冶工房竪穴建物1棟(9世紀末～10世紀) 竪穴中央に円筒形のピット、その周囲に多量の鍛造剥片	嶋田ほか1992
46	日下部II遺跡	香取市	山田町	下総国海上郡布万郷	・黒部川上流と常磐川上流の分水界・竪穴建物1棟、小鍛冶工房 鞆羽口、多量の鉄滓	香文セ2001
47	大谷製鉄遺跡	香取市	佐原市	下総国海上郡大倉郷	・香取のうみから延びる支谷を臨む台地上・未調査	千文セ1998
48	今都カチ内遺跡	東庄町	—	下総国海上郡橘川郷	・北方、東方、西方の三方を香取のうみの低地に囲まれた広大な台地・竪穴建物79棟(飛鳥～平安)・数棟の竪穴建物から大量の鉄滓や鞆の羽口 10棟頭の竪穴建物やそのほかの遺構から鉄滓、軽石状遺物・製鉄炉未検出	石倉2013
49	牛込遺跡	銚子市	—	下総国海上郡石田郷	・香取のうみに注ぐ森戸川の支谷を南に臨む台地、(南?)斜面・鉄生産遺構、鞆・鉄滓等数箱	
50	岩井番匠山遺跡	旭市	海上町	下総国海上郡石井郷	・梅海を西方に臨む台地、斜面・竪穴建物7棟、掘立柱建物7棟、製鉄関連の竪穴状遺構1基(古墳後期～平安) 南側斜面から多量の鉄滓・製鉄炉未検出	本多2016
51	三崎3丁目製鉄遺跡	銚子市	—	下総国海上郡三前郷	・太平洋側(屏風ヶ浦)に向かって下る南斜面から鉄滓出土・未調査	

### ○香山新田中横堀遺跡

本遺跡の位置は上総国に含まれるとみるが、取香和田戸遺跡や東峰御幸畑西遺跡にも比較的近い位置である。新田浩三は製錬炉が3回にわたって操業されたと考察し、その操業サイクルを復元した(新田1998)。報告書では時期の特定が困難としながらも、遺構の様相や出土した小刀を根拠として、10世紀?~13世紀?としている。この歴年代については、再検討の余地があるとみる。

### ○金沢台遺跡

香山新田中横堀遺跡から小支谷を介して、西やや南方に位置する。所在する台地の小字名が金沢台であるが、南方の小支谷の小字名にも金沢台があり、ほかに「下金沢」がみられる。また本遺跡と香山新田中横堀遺跡間の小字名が「小金堀台」である。さらに香山新田中横堀遺跡西方・南西方の小字名をみると、「大金堀・金沢三又・上金沢」がある<sup>5)</sup>。

金沢台遺跡は2020年度の(公財)千葉県教育振興財団の調査により、鉄生産関連の土坑・平場遺構が見つかった。土坑からは7世紀後半の暦年代とみられる土師器杯が出土しており、操業の開始年代を示す。2020年度の調査時点では製錬炉が見つかっていないが、箱形炉と想定される<sup>6)</sup>。

### ○間程台遺跡

金沢台遺跡の北方に位置する。両遺跡間は東方からやや大きな支谷が入り込み、両遺跡を分けているが、西側は台地が続いており、一体の遺跡とみることもできる。2020年度の(公財)千葉県教育振興財団の調査により、両遺跡間の谷部、本遺跡から見れば南側斜面に大型の炭窯1基が見つかった。現時点で詳細な時期は不明であるが、古代の築造の可能性が高い。また北側にももう1基炭窯があるが、台地上の築造であり、こちらは古代の所産か断定しがたい。

### ○北囲護台遺跡

鍛冶工房の操業時期は小牧美知枝によって7世紀第3四半期~第4四半期前半と考察されている(小牧・阿部ほか1998)。岩山中袋遺跡や沖ノ台遺跡群とともに、飛鳥時代から平安時代までの鉄生産関連遺跡としては東国最古級である。鍛冶工房では2基の鍛冶炉が見つかっており、1基は精錬鍛冶炉、もう1基は鍛錬鍛冶炉である。同一工房内で性格の異なる鍛冶炉が存在することは特異であり、小牧は年代の古さとともに、本遺跡の重要性を強調した。また本遺跡で見つかった木炭を焼成するための土坑も、類例が少ないことを指摘した。

松井和幸も本遺跡の鍛冶炉をとりあげ、防湿施設の地下構造がある鍛冶炉を精錬鍛冶炉(大鍛冶炉)、地下構造がない鍛冶炉を鍛錬鍛冶炉(小鍛冶炉)とした(松井2022)。

本遺跡の鍛冶関連遺物を分析した大澤正己は、鍛冶原料鉄の一つが砂鉄由来であり、近接する鉄生産遺跡群から搬入された可能性を指摘した。しかし大澤は原料鉄が砂鉄だけではなく、鉄鉱石由来のものがあることも明らかにしている。このことについて小牧は前段階搬入の鉄製品の再加工(故鉄利用)か、鉱石系か、留意すべきと述べている。

調査範囲内北側の竪穴建物群は鍛冶関連遺物が多く出土し、工人が居住していた地域である。南方至近に当該期の大集落である囲護台遺跡群が存在する。その間は台地の幅がやや狭くなるが、遺構の分布状況から切れ目なく続くとみる。

### (3) 下総国香取郡の鉄生産遺跡 (第1表No.14~24)

#### ○長田舟久保遺跡

調査区外の台地平坦部および南方・東方の斜面に、集落・鉄生産遺構が存在する可能性がある。竪穴建物群の時期について報告書では、013号出土遺物から9世紀前半としている。しかし013号から出土したほぼ完形の土師器杯は底径が大きく、完形の須恵器杯も箱形であることから、構築時期は8世紀後葉である。また伴出の二彩(三彩?)陶器小型壺も8世紀代のものである。012号建物出土の非ロクロ土師器杯の歴年代については絞りがたいが、竪穴建物が隅カマドをもつこととあわせて、こちらも8世紀後葉の可能性が高い。逆に013号出土の土師器有台杯は10世紀代のものである。以上、本遺跡の集落は8世紀後葉、第3四半期頃に始まり、10世紀前半まで続く。鉄生産も集落の開始とともに始まるが、下限については不明瞭である。

#### ○名木鎌部製鉄遺跡

農業用水路工事によって断面が露出した製錬炉が見つかった。実見した沼澤豊によれば、ほぼ東西20mにわたって厚さ30~40cmの鉄滓の層が断続して続き、途中2か所に赤化した粘土がみられるとのことなので、複数炉及び関連遺構の存在を想定できる。また沼澤は地元の方から聞いた話として、別の谷筋にもう1か所、鉄滓が出土する場所があることを紹介している(沼澤1998)。

#### ○猿田遺跡・タラカイⅡ遺跡・天神山遺跡・イノフカイ遺跡・大堀山遺跡・辰巳ヶ入遺跡

これらは筆者が想定する「真敷郷」に所属するか、または所属郷が不明な鉄生産遺跡群である。辰巳ヶ入遺跡は調査・報告されているが(新田ほか2019)、そのときの調査は台地上の一部であり、鉄生産にかかわる遺構・遺物は見つかっていない。なお訳草郷に帰属する可能性もある。

### (4) 下総国匝瑳郡の鉄生産遺跡 (第1表No.25~45)

#### ○楯穴製鉄遺跡・カナクソ製鉄遺跡・沢カナクソⅡ遺跡・ツネヤ遺跡・猪穴製鉄遺跡・平山台遺跡

楯穴製鉄遺跡は栗山川上流東方、ほかの遺跡は栗山川上流西方に位置する。これらは筆者が匝瑳郡田部郷内と想定する地域に所在する遺跡群である。

このうち発掘調査がされたのは平山台遺跡のみである(大賀1987)。7世紀中葉から8世紀第3半期までの時期の集落で、8世紀代を主体とする。掘立柱建物群も台地やや南寄りに位置する。小鍛冶炉1基が竪穴建物群に囲まれるような状況で、台地中央部の平坦面で見つかった<sup>7)</sup>。浅い皿状の土坑が2基連結したような双円形の遺構である。西側のものは径60cm前後で底面に火床面がある。東側のものは径70cm~80cmで多量の鉄滓と少量の炭が出土した。西側のものは東側のものに比べて鉄滓の量が少ない。小鍛冶炉は単独で検出された。本来、竪穴建物内に存在したのか、掘立柱建物内であるのか等の様相は不明である。竪穴建物群のうち、8世紀中葉の時期の1棟から鞆羽口が出土し、同じ時期の別の1棟から椀形滓が出土している。後者は小鍛冶炉の近くに位置する。小鍛冶炉の時期については遺構そのものからは不明であるが、それらの様相から8世紀中葉とみる。そのほかの竪穴建物についてはとくに鉄滓の出土量は多くないとみられる。また関連遺物が出土したのもも含めて顕著な工房の様相はうかがえない。

周囲に未調査範囲があり、遺構の数量が増えることは確実である。またトレンチ調査により遺構がないとされたところにも集落は広がると想定する。遺構は現在のグレンオックス・カントリークラブのクラブハウス部分で多く見つかるとは、本調査が実施されたが、集落は狭い陸橋部を介した西方のC地点にも広がっ

ている。こちらは現状保存されている。

#### ○長津台2号遺跡

常磐川上流の支谷を南に臨む台地上に立地する。第4次調査1号竪穴建物から鉄滓・製鉄炉壁材が見つかった。伴出の土師器小皿・土師器杯の様相から、竪穴建物の廃絶時期は10世紀後葉から11世紀前葉である。第4次調査で見つかった奈良・平安時代の遺構はこの竪穴建物のほかに9棟の掘立柱建物がある。掘立柱建物の時期は出土遺物の様相から9世紀後葉を前後する時期と推定されている。

本遺跡は第1次～第3次調査でも多くの掘立柱建物・竪穴建物が見つまっている（戸村2001、戸村・鬼澤2001）。この建物群の存続時期について、戸村勝司朗は出土土器から8世紀中葉から9世紀後葉までと考察している。

#### ○後田製鉄遺跡・離山瓦窯製鉄遺跡・猪草野1号製鉄遺跡・保保示戸1号製鉄遺跡・保保示戸2号製鉄遺跡・金草製鉄遺跡・長津製鉄遺跡・長熊1号製鉄遺跡・長熊2号製鉄遺跡・行屋製鉄遺跡・八谷田製鉄遺跡

これらは長津台2号遺跡の周囲に存在する鉄生産遺跡である。筆者が想定する匝瑳郡珠浦郷内に所在する。いずれも未調査であり、詳細は不明である。多くの遺跡が土地に何らかの手が加えられたことによる不時の発見である。なお『千葉県埋蔵文化財分布地図（2）』（以下『分布地図（2）』）には、旭市（旧干潟町）鐫木に湯ノ木1号製鉄遺跡の所在が記載されているが、時期が近世とされているため、第2図には位置を記入していない。しかし再検討の必要があるとみる。本稿の「はじめに」で東総三郡の未調査遺跡の年代について、ほぼ奈良・平安時代と「ほぼ」を付けたのはこの遺跡の存在による。鐫木周辺にはここでとりあげただけでも鉄生産遺跡の数が多く、さらに未発見の遺跡が存在するとみる。

#### ○桜井釜山台遺跡（干潟桜井遺跡）

1976年度の概報では精錬炉2基で1基は一部残存としているが、不明瞭なため、本稿では少なくとも1基は存在するとしておく。また奈良・平安時代の竪穴建物27棟のうち2棟が小鍛冶遺構と報告されているが、鉄生産関係の竪穴建物はより多いとみる。

#### ○桜井平遺跡

鍛冶炉2基が竪穴建物内に存在した可能性があるが、竪穴建物は見つからなかった。鍛冶炉は安間拓巳の分類によるⅡb型に相当する（安間1995）。集落・鉄生産遺構は台地北部の北側斜面に近い位置から見つかった。北方には支谷を介して桜井釜山台遺跡が所在しており、鍛冶炉および竪穴建物群は桜井釜山台遺跡との関係が強い。

### （5）下総国海上郡の鉄生産遺跡（第1表No.46～51）

#### ○岩井番匠山遺跡

鉄滓集中地点と、掘立柱建物の多くが古墳時代と把握されているが、不確実である。むしろ周囲の遺跡の状況からは奈良・平安時代の可能性が高いとみる。鉄滓出土地点の時期も不明瞭であるが、古墳時代後期の土器とともに平安時代の土師器杯も出土している。ただし平安時代の杯の歴年代が10世紀以降であるのに対し、奈良・平安時代の竪穴建物の時期は出土土器からみると8世紀中葉～9世紀中葉の幅におさまり、時期が合わない。平安時代の杯の遺存度が低いとみられるため、鉄滓出土地点の時期については8～9世紀代とみるが、詳細な時期を特定できない。

近隣の岩井安町遺跡で弥生時代終末期に比定される東国最古の鍛冶遺構が見つまっているが、本稿で対

象とする時代とは隔たりがあるので、詳しくとりあげない<sup>8)</sup>。

#### ○今郡カチ内遺跡

竪穴建物の暦年代をみると7世紀後葉から9世紀中葉にわたるが、8世紀代の遺構が多い。鉄生産にかかわる比較的大規模な集落である。未検出の製錬炉が周囲の斜面に存在するとみる。

#### ○牛込遺跡<sup>9)</sup>・三崎3丁目製鉄遺跡<sup>10)</sup>

牛込遺跡は豊里ニュータウン造成に先立ち、立正大学が調査を実施したが、報告書は刊行されていない。鉄生産遺構・竈などが見つかり、数箱分の量の遺物が出土した。遺構の様相・時期等の詳細は不明である。三崎3丁目製鉄遺跡は屏風ヶ浦に続く南側斜面から鉄滓が見つかったことによって、把握された遺跡である。未調査である。

## 2 下総国東部およびその周辺の鉄生産遺跡の歴史的意義

### (1) 操業年代

山方郷(里)周辺の主要遺跡群(取香和田戸遺跡・東峰御幸畑西遺跡・一鍛田甚兵衛山北遺跡・香山新田中横堀遺跡・金沢台遺跡・間程台遺跡)を総体としてみると、7世紀後葉から営まれている。現状では8世紀後半にみられないが、9世紀中葉頃に再び営まれる。9世紀後葉以降は不明瞭である。調査された遺跡は鉄生産遺跡群の一部であり、8世紀後葉や9世紀後葉の時期の遺跡も存在するとみる。その点を保留するとしても、鉄生産遺跡群は長期にわたって造営された。

岩山中袋遺跡と沖ノ台Ⅰ・Ⅱ遺跡は7世紀後半に営まれた遺跡である。このうち、岩山中袋遺跡はその位置から山方郷(里)と関係する可能性もある。しかし遺跡の立地からは武社(射)との関係も捨てがたい。両者間や沖ノ台Ⅰ・Ⅱ遺跡南方に別の鉄生産遺跡群が存在するならば、武社(射)の勢力が造営に関わった可能性がより高まる。岩山中袋遺跡の性格については、本稿では断定せず、後の下総国埴生郡山方郷(里)、上総国武射評(郡)の双方に関係する可能性があるとしておく。あるいは印波(埴生)と武社(射)との交通・協力関係(田中2010)があるならば、埴生から武社(射)にまたがる鉄生産遺跡群には、双方ともに関与した可能性がある。

奈良時代前半から平安時代初頭にかけての鉄生産が想定されている畑ヶ田遺跡群は印播郡との境界に近い山方郷内に位置する。造営にさいしては、同じ山方郷中央の遺跡群からの技術供与があったとみる。

房総の鉄生産遺跡は8世紀後半にあまりみられないことが、神野信によって指摘されている(神野2004)。しかし東総三郡においては未調査の遺跡が多く存在することと、成田空港周辺にもまだ未調査遺跡があることから、本稿では断定せず、今後の課題とする。

香取郡訳草郷に所在する長田舟久保遺跡の鉄生産関連の竪穴建物は、8世紀後葉に営まれたものである。同じ訳草郷内の野毛平木戸下遺跡の鉄生産遺構の時期は9世紀後半～10世紀である。訳草郷では長田・野毛平遺跡群が広く調査されているが、郷域は広く、両遺跡間を埋める時期の鉄生産遺跡が存在するとみる。

香取郡健田郷内に位置する名木鎌部製鉄遺跡群は近隣に名木鎌部廃寺・名木鎌部遺跡(石倉2013)が所在する。鉄生産遺跡群の開始年代は寺院創建年代の8世紀後半(沼澤1998)である。製鉄遺跡群の造営が廃寺・名木鎌部遺跡、特に廃寺の建立を契機とするものならば、製鉄遺跡群は専用の可能性もある。しかし鉄生産遺跡が別地点に複数あること、廃寺の建物遺構が一字であることから、生産物は廃寺や近隣集落だけではなく、さらに周辺の集落にも供給された可能性が高いとみる。

香取郡大槻郷内に位置する九美上製鉄遺跡は、集落の主体時期が9世紀代であることから製錬炉も9世紀代と想定されている（荒井2010）。しかし集落形成の開始時期は8世紀後半であり、鉄生産開始もそこまでさかのぼる可能性がある。

匝瑳郡田部郷の鉄生産遺跡群のうち、発掘調査されたものは平山台遺跡のみである。見つかったのは小鍛冶炉1基であり、時期は8世紀中葉である。しかし製錬炉については発掘調査されたものがなく、様相が不明瞭である。集落や地形の様相から近くに製錬炉が存在するか断定しがたい。田部郷の鉄生産遺跡群の時期は不明であるが、田部郷東側に位置する楯穴製鉄遺跡は、歴年代の一端が9世紀代と判明した九美上製鉄遺跡に近いことから、9世紀代の可能性がある。平山台遺跡の様相からみると、田部郷の鉄生産遺跡群の開始年代は8世紀までさかのぼるかもしれない。しかしその様相は鉄生産遺跡の経営を強く示唆するものではないことから、製錬については現状では断定しがたい。

匝瑳郡珠浦郷の鉄生産遺跡は数が多いが、調査された遺跡は長津台2号遺跡のほかにはない。長津台2号遺跡にしても炉壁材が出土しただけであり、製錬炉は見つかっていない。鉄生産遺跡群の造営年代は不明瞭である。しかし長津台2号遺跡の様相から、少なくとも10世紀後葉以前の時期に存在することは確実である。

匝瑳郡では桜井釜山台遺跡（干潟桜井遺跡）や桜井平遺跡など日部郷内にも鉄生産遺跡が存在する。その歴年代について蜂屋孝之は9世紀以降としている（蜂屋1998）が、桜井平遺跡の竪穴建物に8世紀後葉のものがあることから、開始年代はそこまでさかのぼる可能性がある。日部郷は珠浦郷の東に隣接する郷であり、桜井平遺跡なども珠浦郷の鉄生産遺跡群と関係があるかもしれない。なおこれら日部郷内の鉄生産遺跡群の様相から、珠浦郷内の鉄生産遺跡群の開窯も9世紀以前にさかのぼると推測する。

海上郡内でやや東側に所在する今郡カチ内遺跡では製錬炉は見つかっていないが、周囲に存在する可能性が高い。今郡カチ内遺跡の竪穴建物に8世紀代のももの多いことから、鉄生産は8世紀から始まると考える。

以上をまとめる。とりあげた鉄生産遺跡のうち発掘調査が行われたものの開始時期は、ほぼ7世紀後半から9世紀後半までの間である。9世紀後半から開始とされているものはさらにさかのぼる可能性があるが、調査が一部である等の事情により、不明瞭である。詳細な変遷を追えるのは山方郷（里）の鉄生産遺跡群だけであり、本稿では大きく古代のなかでとらえておく。

珠浦郷・田部郷・「真敷郷」およびかつての「真敷郷」地域に所在する遺跡群は未調査のものが多く、それらの開窯時期は不明である。珠浦郷の場合、長津台2号遺跡1号竪穴建物の廃絶時期が10世紀後半とすると、鉄生産遺跡群はそれ以前といえるが、どれだけさかのぼるかは不明である。

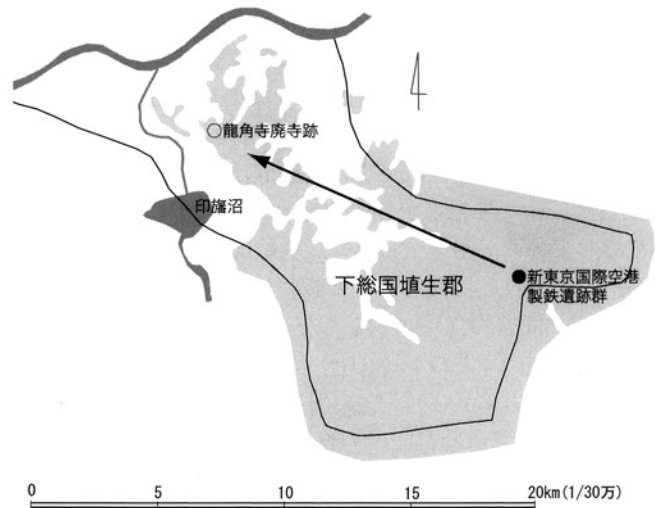
## （2）鉄生産遺跡の造営主体と生産物運搬ルート

### A 山方郷周辺の鉄生産遺跡群からみた生産物の運搬ルート

寺院の建立には釘などの大量の建築資材が必要である。鉄生産遺跡造営の重要な契機の一つは寺院の建設にあった。このような視点から山方郷（里）の鉄生産遺跡群をみると、その造営の契機には同じ埴生郡（評）内の栄町龍角寺の建立がある。この点については既に佐々木義則が指摘していることは先述したとおりであり、本稿でも佐々木作成の図を示す（第4図）。

本項ではこのルートについてより具体的に考える（第5図）。第5図に埴生郡山方郷周辺における推定

水上交通路及び陸路を示した。水上交通路については、河川を利用したと考える。奈良・平安時代の舟が発掘されていないのはこの地域に限ったことではなく、第5図はあくまでも仮説を図示したものである。しかし作られた鉄生産物は何らかの手段でどこかへ運ばれた。鉄素材は重量があるため、その運搬には水上交通をかなり利用したとみる<sup>11)</sup>。また本項にかかわる幹線の陸上交通路は、主として分水界上に存在すると考える。これについてもこの周辺では道路遺構が発掘されておらず、河川以上に不安定である。図では直線的に示したが、実態は細かく曲がりくねったものとみる。水上交通との連携をみすえて大局を示したものである。なお山方郷の鉄生産遺跡群の西方については、鉄生産遺跡群から郷家集落が存在するとみる川栗周辺への経路と、鉄生産遺跡群から南やや西方に向かう2経路を代表として示した。後者について筆者は印播郡八代郷および印播郷の東側に向かう道と考える。なお八代郷・印播郷の東側の郷域については定見がなく、印播郷の郷域についてはより北方とみる見解もある(木原2022)。陸上交通路については、図示した以外に多く存在することは当然のことであり、本項に関わるものを強調したにすぎない。交通路の根拠についてはわずかに地名(後述)をとりあげる。しかし筆者は地誌に精通していないため、地名についても根拠といえるかどうかわからない。本項は以上の仮説を前提に記述を進める。



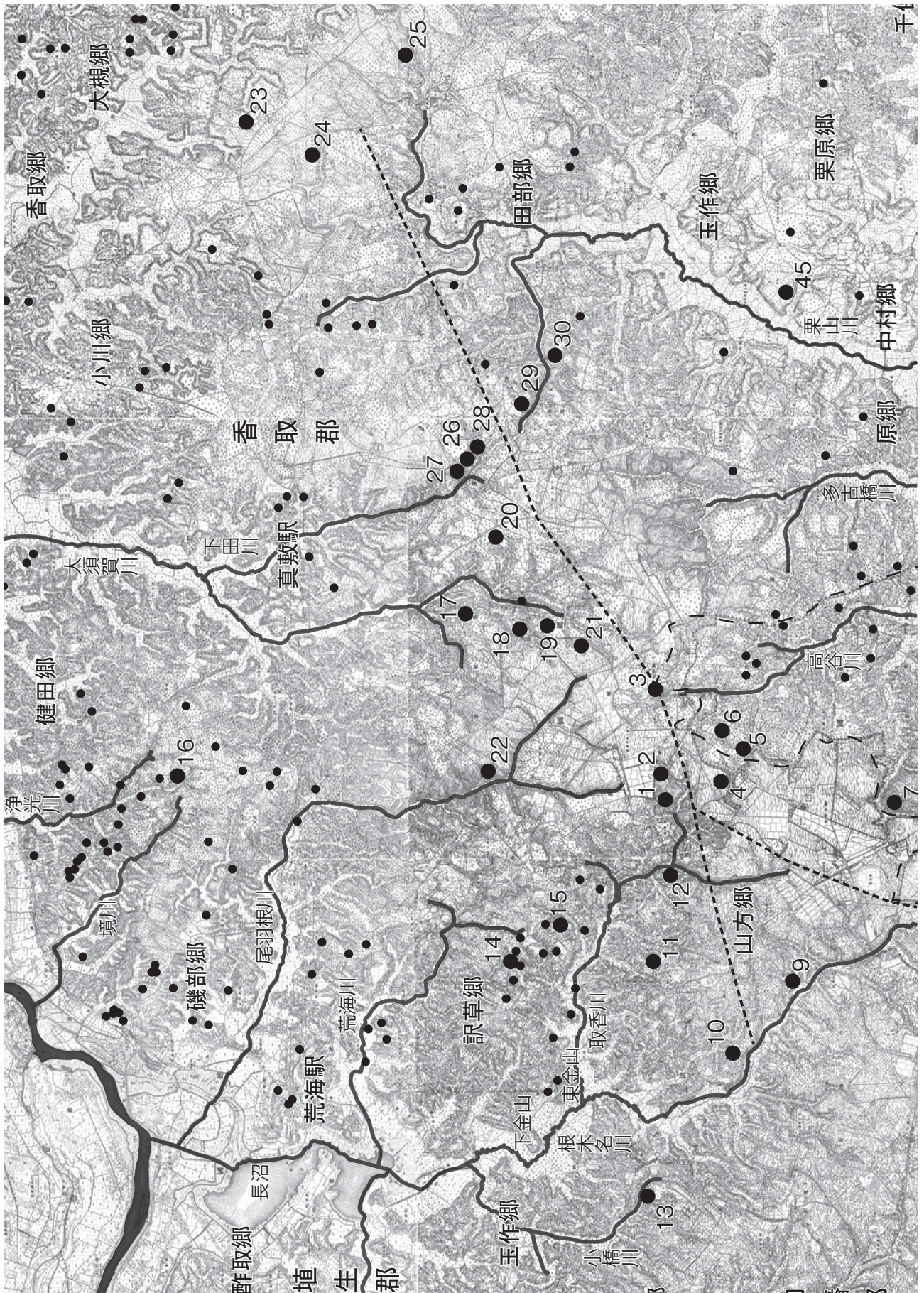
第4図 山方郡の鉄生産遺跡群と龍角寺  
(佐々木2012文献から転載)

山方郷の鉄生産遺跡群で生産された鉄素材・鉄製品の搬出について、まず西北方への河川交通からみる。取香川を下って根木名川に達した後は長沼・香取のうみ方面に向かって北に下り、埴生郡酢取郷・麻在郷や、香取郡詔草郷および磯部郷の東側地域に供給される。取香川から進んで根木名川に合流するやや手前、取香川の北岸になるが東金山の地名がある。さらにその先の根木名川右岸(東岸)には下金山の地名がある(第5図)。これらの地域はいずれも香取郡詔草郷の郷域内であるが、この地名が古代からのものであり、「金山」が山方郷(里)の鉄生産遺跡群を表すものならば、地名が取香川・根木名川を介した鉄運搬を表す可能性がある。

埴生郡玉作郷へは根木名川支流の小橋川を南に遡上したことで、陸上交通の双方の可能性があるとみる。また先述した八代郷および印播郷東側へは陸上交通のほか根木名川を南に遡上した可能性もある。

筆者は山方郷の主要集落が存在するところは川栗館跡の調査(渋谷ほか2001)などから、成田市川栗・久米野・吉倉方面にあるとみている。これらの地域についても根木名川を南に遡上して運搬した可能性があるが、取香・東峰方面からは迂回といえるルートである。馬搬等により陸路をとればより直行するため、陸路の方が重視されたとみる。

根木名川からは長沼周辺で玉作郷と酢取郷の間の支谷を流れる十日川を利用し、坂田ヶ池周辺で麻在郷の台地に上がり、埴生郡家周辺に至る。栄町五斗蒔遺跡出土の瓦に刻まれた「水津」(石戸・小牧1997)が示す津は印播沼側よりも、根木名川水系側の可能性が高い。なお「水津」は上陸地点だけでなく、その



第5図 山方郷の鉄生産遺跡群周辺における推定河川交通・陸上交通（約 1/100,000）

----- 推定陸上交通路

周辺の地名を表す可能性がある。山方郷の鉄生産遺跡群から龍角寺周辺地域までは河川を利用すれば比較的短時間で行くことができるとみる。

五斗葺瓦窯からは「加刀入」の文字瓦も出土しており、龍角寺造営に際しては後の香取郡地域の協力もあった。印波国造の勢力範囲は評の成立時に埴生評と香取評に分割された。その境は根木名川・長沼であるが、評成立後も埴生郡と香取郡の協力関係は続いていたと考える。

山方郷の鉄生産遺跡群の生産物はかなりの量であり、埴生郡だけではなく周辺の他郡にも供給された。まず取香川・根木名川を介して香取郡訳草郷・磯部郷に運ばれた。これが鉄運搬ルートのひとつである。これとは別に取香・東峰方面から陸路で荒海川の源流部に至り、そこから荒海川の水運を利用した可能性もある。荒海川の南岸は訳草郷、北岸は磯部郷の荒海駅周辺地域である。また磯部郷全域への運搬については、尾羽根川の水運が利用された。尾羽根川の源流は東峰に近いので、むしろ磯部郷へは尾羽根川ルートの方が主要ルートの可能性がある。

取香・東峰から周囲に行くには陸路も利用した。東北東に向かい、旧大栄町前林付近に達すれば、そこは大須賀川の源流部である。大須賀川を下れば香取郡健田郷・小川郷に行くことが容易である。

また前林からさらに北東方向に向かい、旧大栄町官林付近に達すれば、大須賀川の支流である下田川の源流である。下田川を下る途中の東岸に旧大栄町南敷がある。真敷駅の遺称地である。

官林の東方は旧栗源町沢である。沢は取香・東峰からはやや遠くなるが、山方郷の鉄生産遺跡群から香取郡健田郷・小川郷・「真敷郷」へ鉄を供給するための陸路が存在するとみれば、沢までの陸路があってもいい。沢周辺は匝瑳郡田部郷の西側地域である。

取香・東峰から沢に至る途上には、成田市（旧大栄町）タラカイⅡ遺跡等の鉄生産遺跡がある。大須賀川上流部の成田市前林・一坪田・十余三周辺から、栗山川支流上流の香取市沢周辺にかけては、広く鉄生産遺跡が存在する。これらの鉄生産遺跡の操業年代は一部を除いて不明瞭であるが、鉄生産開始にさいして山方郷の鉄生産遺跡群から技術供与があった可能性がある。

山方郷の鉄生産遺跡群だけで香取郡など周辺の諸郡の鉄需要を満たすのは不可能であり、各郡においても規模の差はあれ鉄生産遺跡群が営まれた。その背景に埴生郡と周辺他郡との協力関係があった。ただし匝瑳郡は鉄生産遺跡の数量が非常に多い。その生産開始が山方郷の鉄生産遺跡群よりかなり下るものならば、埴生郡から技術指導を受けて成立した可能性があるが、同等の古さをもつ遺跡が存在する場合、山方郷の鉄生産遺跡群と並行して成立した可能性がある。匝瑳郡の鉄生産遺跡群の開始年代が不明瞭であるため、今後の検討課題である。

名木鎌部廃寺と鉄生産遺跡の位置関係からも鉄生産遺跡と古代寺院との密接な関係がうかがえる。またそれらにかかわる集落も見つかった。なお成田市（旧下総町）名木周辺には名木鎌部遺跡以外にも奈良・平安時代の集落が多く存在する。名木鎌部製鉄遺跡群周辺の操業規模が大きいものであるならば、生産物は周辺の集落にも供給されたとみる。

名木鎌部廃寺で出土した山田寺式の単弁八葉蓮華文軒丸瓦は、龍角寺系の瓦である。この瓦のあり方から、やはり山方郷の鉄生産遺跡群から名木鎌部鉄生産遺跡群への技術指導が存在したとみる。

埴生郡西方の印播郡についてみる。印播郡では後の八代郷（里）内に位置するとみられる北囲護台遺跡で東国最古級の精錬炉が見つかったが、本格的な製錬炉をもつ遺跡（群）は発見されていない。今後発見されることがあるかもしれないが、印播郡では集落の調査事例が比較的多いにもかかわらず、手がかりを

つかめない状況である。そのため鉄製品そのものおよび製鋼・鍛錬の原料となる素材は他地域からの供給が主体であったと考える。その多くは山方郷の鉄生産遺跡群をかかえる埴生郡からとみる。

印播郡内における埴生郡の影響は、以下の遺跡の様相からもうかがえる。まず言美郷には木下別所廃寺（滝口編1978・1980a・辻1998）・曾谷窪遺跡（曾谷ノ窪瓦窯を含む）（滝口編1980b・進藤1995・小牧2002・糸川ほか2011）<sup>12)</sup>・池ノ下遺跡（加藤2008）がある。また船穂郷には西根遺跡（小林ほか2005）がある。さらに大塚前廃寺（佐藤・沼沢1973・今泉1990・1998）は船穂郷と三宅郷の境に位置する遺跡である。

木下別所廃寺の瓦は龍角寺の影響を受けたものであり、瓦だけでなく建立にさいして埴生郡（評）地域からの協力があつた。その瓦を焼成したのが曾谷ノ窪瓦窯であり、その築窯も同様である。曾谷窪遺跡では鉄生産遺構も見つかった。現状では時期が下るようであり、埴生郡からの技術指導とは断定しがたいが、その可能性はある。なおこの周辺地域は古墳の様相からみて、飛鳥時代から埴生（印波）の影響があつた。池ノ下遺跡からは「酢取郷…」の墨書土器が出土した。また西根遺跡の墨書土器から、船穂郷長は埴生郡大領と同姓である大生部直氏であることがわかつた。さらに大塚前廃寺からは埴生郡を表す「埴」の文字瓦が出土した。

埴生郡から印播郡への鉄生産物等の供給にさいしては、印旛沼による水上交通がかなり利用された。もちろんその前後には陸上交通もあり、実態は水上交通と陸上交通の併用である。なお印播郡北部の言美郷周辺には旧鬼怒川水系のほか、陸路もかなり利用されたと想定する。

印播郡西部の三宅郷周辺においても大塚前廃寺が近接して存在する<sup>13)</sup>ことから、鉄製品等は埴生郡から供給された可能性がある。しかし三宅郷は相馬郡とも接する郷であり、柏市のなかでも旧沼南町域等、相馬郡南部の鉄生産遺跡群から供給された可能性もある。なお言美郷や船穂郷においてもその可能性があり、今後の検討課題である。

視点を埴生郡から東南方の地域に転じる。取香・東峰周辺と芝山町香山新田周辺は非常に近い位置関係である。香山新田周辺は高谷川の源流部である。山方郷の鉄生産遺跡群の生産物は、高谷川による水上交通を介して加毛郷や理倉郷など上総国武射郡の諸郷にもたらされたとみる。なお、武射郡・武社内や近い地域の鉄生産遺跡は年代が古いものがあるため、当初から埴生と武射（社）の協力関係があつたと考える。

## B 珠浦郷・日部郷周辺の鉄生産遺跡群からみた生産物の運搬ルート

次に匝瑳郡珠浦郷・日部郷の鉄生産遺跡群と生産物運搬ルートを検討する。本稿1（1）の郡郷比定と立地のところで、珠浦郷の郷家集落である長津台2号遺跡およびその周辺の鉄生産遺跡群については、栗山川支流の常磐川による水上交通が重要であると記述した。ここでは交通路と田部郷を含む匝瑳郡の鉄生産遺跡群の造営主体を考える。

水上交通路としては碇海も重視されたが、匝瑳郡内をみると、常磐川や借当川など栗山川支流の河川も重視された。珠浦郷からみて常磐川を西方に降れば、玉作郷など内陸側の諸郷に行くことは容易である。その途中で南に折れれば栗原郷、栗山川に至って北に遡上すれば田部郷、南に降れば中村郷に至る。また珠浦郷からは陸上交通で千俣郷・匝瑳郷に至る動線もあつた。

珠浦郷の東方に位置する日部郷についても、鉄生産遺跡を多くもつ郷として両者を一連でみると、北方の海上郡布万郷・軽部郷は双方の郷から近く、海上郡神代郷は日部郷に近い。また日部郷北方の谷から黒部川を降ると海上郡編玉郷・麻績郷・城上（城内）郷に達し、そこまで行けば香取郡東方の諸郷にも近く

なる。

珠浦郷・日下部郷の鉄生産物が香取郡や海上郡の遠方の諸郷にまで運ばれたかどうかは、遺跡群の様相が不明瞭なため断定しがたいが、少なくとも近在の匝瑳郡・海上郡諸郷にはもたらされたとみる。

水上交通はもちろん、陸上交通においても後代に痕跡を見出すことはむずかしい。しかし鉄生産以外にも水稲や畑作の収穫物があり、水産物の獲得もあった。また糸・布・土器・瓦・木製品・塩・漆・馬牛などさまざまな生産や生業があった。これらの生産物の運搬等のために、現代では把握しがたい多くの道路・水路が存在した。本稿でとりあげる鉄生産もその一部である。ただし古代においては生産のなかでも鉄生産はかなり重視されたとみる。

常磐川の水上交通については、御前鬼塚古墳を要する鍋木古墳群と多古町北条塚古墳との位置関係からみて、少なくとも古墳時代後期から存在した（荻2003、糸川2021a）。

田部郷の鉄生産遺跡群は、山方郷の鉄生産遺跡群と珠浦郷の鉄生産遺跡群との中間的なところに位置する。これらの遺跡群については、先に山方郷周辺の鉄生産遺跡群との間に陸上交通路が存在する可能性を言及した。しかし匝瑳郡という視点からみると、栗山川を介した珠浦郷の鉄生産遺跡群との関係をより重視すべきかもしれない。

### （3）下総国東部周辺の鉄生産遺跡群の歴史的意義

山方郷（里）鉄生産遺跡群開窯の大きな動機は龍角寺にあることを先述した。しかし龍角寺尾上遺跡のように特殊な遺跡からも大型の釘が多量に出土している（石戸ほか1991）ため、埴生評（郡）家を含めた龍角寺周辺地域の遺跡群とする方がより妥当である。ただし尾上遺跡で検出された特殊な方形遺構の時期には山方里（それ以前を含む）の鉄生産遺跡群の造営が始まっていない。しかしその開始は方形特殊遺構の造営を契機の一つとした可能性がある。

後の埴生郡郡領層は尾上遺跡の方形特殊遺構構築のために他地域から入手した大型の釘等の製品を鉄生産造営集団に示した。そして次の龍角寺建立のために領域内での鉄生産の開始を企画した。また彼らの実力をもってすれば、鉄生産開始にあたり先進地域からの技術者招聘も可能であった。大道和人は7世紀第4四半期から8世紀第1四半期における日本の古代製鉄の様相について、「近江で製鉄操業技術を実習、技術者の養成を行い、国家標準型製鉄炉の設計図を携えた技術者を各地に派遣するという体制が整えられた」と考察した（大道2023）。後の埴生郡郡領層である大生部直氏<sup>14</sup>は上宮王家とも強い関係があり、このような体制に積極的に参加した。尾上遺跡の鉄製品については科学的な分析が行われていないが、生産地は近江を含む畿内とみる。そしてそれらの鉄製品は様的な様相ももっていた。近江からの教習を受けた大生部直氏は次の龍角寺造営に際して、本格的な鉄生産を開始した。それは中央政権からみれば、防人や蝦夷征討という国家的大事業の一環であり（大道2023）、大生部直氏もこのことに深く関与した。

後の埴生郡郡領である大生部直氏はその主要な支配地域から南東にある後の下総・上総の広大な分水界地帯を掌握したが、その重要な動機のひとつに鉄生産遺跡群の造営があったと考える。埴生郡の郡域が北西から南東に細長いのは、埴生郡郡領層である大生部直氏の活動によるものとみる。このような鉄生産遺跡群の造営は大生部直氏の経済力や軍事力の源泉の一つである。

川尻秋生が埴生郡司とした大生部直三穂麻呂は神亀元年（724）に陸奥に私穀を献上した功績により、外正八位外から外従五位外に昇叙している（川尻2003）<sup>15</sup>。なお内山俊身は大生部氏について全国に広く

分布するので本貫地を特定できないとしつつも、三穂麻呂については常陸国行方郡大生郷周辺の在地首長である可能性を述べている（内山1998）。常陸国側にも大生部氏は存在したが、『続日本紀』における献上者の記載順や当時の郡領層のあり方からみて川尻の考察が妥当である。この8世紀前半という時期からみて、三穂麻呂は山方郷の鉄生産遺跡群の経営にかかわった可能性が高いと考える。大生部直氏および関係する氏族はこのような力を背景として、言美郷や船穂郷など印播郡西側や、山梨郷など千葉郡東側の地域にも勢力を延ばした。鉄生産物供給の見返りとして何らかの生産物があるとみるが、あるいは埴生郡の領域以外の地域について開発する権利といったものもあるかもしれない。この点は憶測の域を越えず、今後の検討課題である。

なおこのように述べたものの、埴生郡司が周辺の他郡司を圧倒する力をもっているとはみていない。三穂麻呂と並んで昇叙した香取連五百島は香取郡司である（川尻2003）が、昇叙前の位階は外従七位上である。むしろ外正八位下の三穂麻呂よりも上であるが、その差は少ないとみる。また8世紀後半に下るが、印播郡司の文部直牛養は天応元年（781）に私穀を陸奥に献上した功績により昇叙している<sup>16)</sup>。印播郡は埴生郡から鉄生産物の供給を受けているとはいえ、面積は広大であり、後発地域の開発も活発であった。実態としては埴生郡司と印播郡司はときに協力、ときに競合しながら周辺地域の開発を進めていったとみる。このようなあり方は他の郡領層間でも同様である。

埴生郡東方の東総三郡にも鉄生産遺跡は存在する。また後の上総国武射郡にも鉄生産遺跡が存在する。このうち特に匝瑳郡は鉄生産遺跡が珠浦郷・日部郷や田部郷内に多く存在する<sup>17)</sup>。田部郷の鉄生産遺跡群は香取郡にも供給していた可能性がある。また珠浦郷についてもその数の多さから、生産物の供給は郡内にとどまらなるとみる。なお東総は千葉郡や印播郡などと比べると調査事例が少なく、斜面の事例はさらに少ないことから、海上郡や香取郡でも鉄生産遺跡が現在見つかったよりも多く存在することが確実である。

鉄生産遺跡については、匝瑳郡・海上郡・香取郡・武射郡においても、各郡領層等が関与していたと考える。氏族名をあげるならば、匝瑳郡の場合は物部匝瑳氏、海上郡の場合は他田日奉部直氏、香取郡の場合は香取連氏や大中臣氏、武射郡の場合は武射臣氏である。なかでも物部匝瑳氏は匝瑳郡における鉄生産遺跡群の様相から生産物の流通に関与していたと考える。また匝瑳郡珠浦郷では、筆者が郷家集落とみる長津台2号遺跡で炉壁材が出土していることから、珠浦郷の郷長層は鉄生産の経営に深く関与していたとみる。

9世紀前半になるが物部匝瑳氏（匝瑳宿祢氏）は鎮守将軍にたてつづけに就任している。それは東北38年戦争以後であるが、なお東北は不穏な情勢があった。東北の鎮撫にあたり、坂東（出身）の雄族である物部匝瑳氏が起用された。なお物部匝瑳氏は承和二年（835）に物部匝瑳連熊猪が中央官人化し、匝瑳宿祢氏となったため必ずしも下総国匝瑳郡との関係だけであるわけにはいかない。しかし物部匝瑳氏にとって、匝瑳郡が力の源泉の一つであることは確実である。古代の匝瑳郡は鉄生産をはじめとする生産力の上昇および人口増大が顕著であった。なお鉄生産物の内容については、軍事物資もあったかもしれないが、集落へ供給する農工品の比重の方が高かったと想定する。これについては鉄生産遺跡の様相が不明瞭なため断定しがたく、今後の検討課題である。

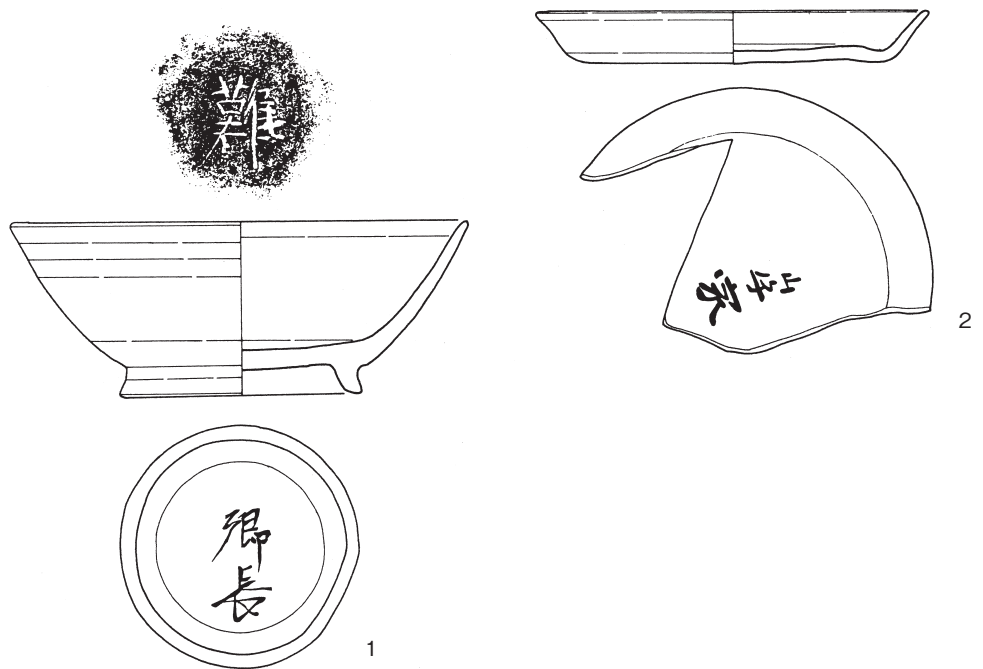
匝瑳郡における鉄生産事業が埴生郡のそれと比べて、遜色のないものであったのかどうかも今後の課題の一つである。特に珠浦郷の鉄生産遺跡は非常に数が多く、もしも山方郷と同等の古さをもつ遺跡が発見された場合、操業規模・継続時期について山方郷を凌駕する可能性すらあり得る。その導入の歴史的契機・

意義については、近江との関連も含めて検討しなければならないと考える。現状では開始時期が全く不明であるため、今後の検討課題とするしかない。

後の上総国武射郡においては、武射評またはそれ以前の武社といえる時期の鉄生産遺跡しか見つからない。沖ノ台Ⅰ・Ⅱ遺跡周辺で、後続する遺跡が存在するかどうかは今後の検討課題である。

これまで埴生郡山方郷や匝瑳郡珠浦郷の郷長が鉄生産関連事業に関与していると述べたが、郷長層と鉄生産遺跡とのかかわりについては、福岡市柏原遺跡群<sup>かしはら</sup>M遺跡の事例からうかがえる。柏原M遺跡は8世紀後半から9世紀前半を中心とする掘立柱建物34棟以上、鍛冶炉・製錬炉24基、鞆羽口、鉄滓などが見つかった遺跡である（山崎1988）。墨書土器の出土が多く、「郷長」（第6図1）・「□長」・「山守家」（第6図2）のほか長文の「□□□守坏之善□」、「寺」、「佐原補」、「五月」などがある。「郷長」は有台の土師器杯の底部外面に書かれているが、底部内面にも「難」のヘラ書きがある。土器の暦年代は9世紀後半とみる。また多量の越州窯青磁や、長沙窯陶磁器、唐三彩曲杯などが出土した。

板楠和子は柏原遺跡を筑前国早良郡昆伊（ひい）郷内の遺跡とし、遺構群については昆伊郷長の居館と考察した（板楠1996）。板楠はまた「山守家」について、「山林の管理と使用を公認された家柄」を示すと考察している。「山守家」は須恵器皿の底部外面に書かれている。土器の歴年代は8世紀後半である。



第6図 福岡市柏原遺跡群M遺跡出土「郷長」・「山守家」墨書土器（1/3）  
（山崎1988 文献より転載）

福岡市博物館市史編さん室では、「山守」について板楠と同様に山林管理に関する職名か氏族名としており、山守部氏・山部氏が鉄生産にかかわると考察している（福岡市2011）。

山守部・山部はヤマト王権直轄の山林の管理や生産物を貢納する職業部（品部）である。奈良・平安時代の山守部氏・山部氏はその品部を由来とする氏族名である。以上から、昆伊郷の郷長層は鉄生産等のために必要な木材を入手するために、近隣の山林を支配したと理解できる。柏原M遺跡の事例は鉄生産における郷長層の関与と山林の重要性を示すものである。

なお匝瑳郡には山上郷という郷が存在する。筆者は山上を「やまべ」と呼称しているが、山上郷は山部氏とかかわる郷であるかもしれない。東北地方の文字資料を検討した山路直充は陸奥国行方郡の鉄生産にかかわる氏族が、当地に存在した山部氏であると考察している（山路2014a）<sup>18)</sup>。山路の考察は説得力があるが、これまで匝瑳郡山上郷周辺で「山」の墨書が検出されたことはなく、山上郷に山部氏が存在したかどうかは速断できない。これを解明する別の有力な方法として、かつて平川南が栗原郷の研究を行った

ように<sup>19)</sup>、日本全体に分布する「山部」・「山上」・「山辺」・「山家」などの郷名・郡名や神社名をもつ地域の研究をあげる。しかしこれには膨大な労力が必要であり、筆者個人では不可能である。筆者自身の今後の課題とするとともに、研究の進展を期待する。

仮に逆瑛郡山上郷に山部氏が存在し、山林管理やひいては鉄生産にかかわったとすると、逆瑛郡全体の問題となる可能性がある。上総国には山辺郡があり、下総国千葉郡には山家郷がある。「山」が付くだけで直接山林とかかわるか断定しがたいが、これらの郡郷名は下総国・上総国における山林の重要性を示すものとみる。本稿で再三言及した埴生郡山方郷も山林支配にかかわる郷名の可能性がある。

## おわりに

これまでに述べた逆瑛郡珠浦郷や田部郷の鉄生産遺跡群については、現在あまり知られていない。それどころか珠浦郷については郷の比定地でさえ定まっていない。この地域の鉄生産遺跡群を呼称する場合、郷名では共通理解が得られず、旧椿海北方という地名を使用するしかない。これらの地域では大規模な発掘が行われていないことが最大の理由である。また古代の鉄生産遺跡は斜面に立地することが多いため、その傾向はより顕著である。時期も不明瞭であるが、本稿では不明なもの開始時期について遅くとも平安時代のうちにあることを述べた。なお開発が及んでいないということは、多くが地中に保存されているということでもある。これらについて今後、操業時期の把握などを目的とした学術発掘が実施されることを期待する。

海上郡については製錬炉をもつ遺跡が見つかっていないが、今郡カチ内遺跡のあり方などから、その周辺の斜面に存在するとみる。

大規模な発掘が行われた成田空港周辺、筆者のいう山方郷（里）の鉄生産遺跡群は全国的にも知られ、研究も進んでいる。この鉄生産遺跡群造営の指示者は埴生郡の郡領層であり、郡領の指示を受けて、山方郷の郷長層が経営に大きく関与した。なお山方郷の郷家集落については、川栗館跡の調査（渋谷ほか2001）などから成田市川栗周辺に存在すると考える。また東総三郡の鉄生産遺跡群についても開発の指示者は郡領層であり、武射（社）においても指示者は地域の首長層である。逆瑛郡の場合は珠浦郷をはじめ田部郷や日部郷の郷長層も関与しており、とくに珠浦郷の郷長層の関与が大きい。あるいはこれらに山上郷の郷長層が加わるかもしれない。

鉄生産に関しては埴生郡から周辺の他郡に対して技術供与や製品・半製品提供などの協力があつた。とくに印播郡は本格的な製錬炉をもつ遺跡がみられないことから埴生郡に多く依存していたとみる。印播郡西方や千葉郡東方へ大生部直氏が進出した理由の一つとして、埴生郡からそれらの地域への鉄生産物の供給があつたことをあげる。なおこのように述べたものの埴生郡司と周辺の他郡司との間に圧倒的な力の差はないとみていることは、これまで述べたとおりである。

郡間の関係について鉄生産のあり方からみると、埴生郡から周辺各郡への協力以外に、逆瑛郡から香取郡・海上郡・武射郡への協力もあつた可能性がある。しかし逆瑛郡の鉄生産遺跡群の様相は不明瞭であり、今後の検討課題である。

謝辞 本稿の執筆にさいしては神野信氏から全般的なご教示をいただきました。また下記の諸氏からもさまざまなご教示をいただきました。ここにご芳名を記して感謝申し上げます。

赤塚弘美 荒井世志紀 井手稜 小笠原敦子 鬼澤昭夫 菊池敏記 栗田則久 小林信一 小牧美知枝 篠塚栄子  
戸村勝司朗 新田浩三 萩原恭一 平野雅一 山口典子（敬称略）

#### 注

- 1 佐々木義則は、千葉県印旛郡栄町に所在する龍角寺建立にあたって使用された鉄釘等の素材が成田空港周辺の鉄生産遺跡群から供給されたと考察した（佐々木2012）。龍角寺が所在する後の埴生郡（評）と空港周辺の鉄生産遺跡群の関係については、佐々木の見解に拠っている。
- 2 筆者の管見に触れた数少ない事例をあげる。埼玉県比企郡嵐山町に所在する金平遺跡は鎌倉時代、13世紀後半の鑄造工房をもつ鉄生産遺跡である（村上2000）。また東北の事例であるが、秋田県山本郡琴丘町に所在する堂の下遺跡は12世紀後半の製錬炉をもつ鉄生産遺跡である（磯村ほか2004）。
- 3 吉田1903文献。なお「真敷郷」は『和名類聚抄』をはじめとした古代の史料にはみられないため、かっこ付きで使用する。
- 4 加藤貴之は野毛平遺跡群を埴生郡内としている（加藤2020）が、筆者は香取郡詔草郷内の遺跡群とみる。その理由としては、まず野毛平遺跡群に近い長田遺跡群の「長」が「詔（おさ）」から転訛したとみること、また野毛平遺跡群を埴生郡内とすると埴生郡山方郷または玉作郷の範囲が広くなりすぎることと、そのために香取郡詔草郷の比定が困難となることをあげる。
- 5 金沢台遺跡および香山新田中横堀遺跡周辺の小字名については、新田浩三氏からご教示をいただいた。
- 6 金沢台遺跡の調査の様相については、萩原恭一・小林信一両氏からご教示をいただいた。また遺物を実見された神野信氏からは以下のご教示をいただいた。鉄滓は精錬鍛冶滓である。成田空港周辺の製錬炉で生産した高炭素系鉄素材（鑄鉄）は、集落との中間（金沢台遺跡）で脱炭され、鋼にされたものであり、間接製鋼法といえるものである。
- 7 平山台遺跡の鉄生産遺構についても、小林信一氏からご教示をいただいた。
- 8 岩井安町遺跡の鍛冶遺構については報告書のほかに複数の文献でとりあげているが、本稿では一例として穴澤義功の1994年論文のみをとりあげ、ほかは省略する（穴澤1994）。
- 9 牛込遺跡の情報については、銚子市教育委員会 赤塚弘美氏からご教示をいただいた。
- 10 三崎3丁目製鉄遺跡についても赤塚氏からご教示をいただいた。三崎3丁目遺跡の調査時に偶然発見された遺跡とのことである。
- 11 佐久間弘行や内山俊身は下野・下総国境周辺の鉄生産遺跡群について、水上交通の利用を考察している（佐久間1998・内山2017）。
- 12 天野努は木下別所廃寺を含む天神台遺跡を三宅郷内の遺跡としている。天野は言美郷・三宅郷については比定地未詳としつつも、言美郷の郷域を印西市本埜・小林等の周辺、三宅郷の郷域を印西市小倉から木下周辺と想定している（天野2020）。しかし木下周辺を三宅郷とすると、印西市大森から小林まで続く台地のどこかで三宅郷と言美郷の郷境が存在することになる。連続する台地上に境を認めることは難しい場合が多く、この件も同様である。また仮に大森・平岡・小林台地のどこかに言美郷と三宅郷の境があるとすると、言美郷がかなり狭域になるのに対して、金山落としまでいたる三宅郷の郷域は非常に広域となる。金山落とし周辺にどれだけ奈良・平安時代の集落が存在するかを懸念するが、印旛沼北西方に所在する郷の範囲のバランスからも問題がある。国郡郷の境は河川の場合が多いことから、筆者は亀成川の東方・北方の台地および亀成川兩岸の低地を言美郷、西方を三宅郷とすることが妥当と考える。なおこの点についてはすでに山路直充が指摘している（山路2014b）。以上から筆者は天神台遺跡については言美郷内の遺跡と考える。またそれにとどまらず言美郷の中心集落の可能性が高いことを以前に述べた（糸川2018）。
- 13 大塚前廃寺は印旛郡船穂郷内にあるが、三宅郷に隣接する地点に位置するとみる（糸川2019）。ただし大塚前廃寺については、それほど郷の帰属を問題にする遺跡ではないとみる。
- 14 川尻秋生は印波国造・埴生郡司が大生部直氏であると考察した（川尻2003）。
- 15 『続日本紀』神亀元年二月壬子条。

- 16 『続日本紀』天応元年正月乙癸条。
- 17 筆者が珠浦郷・日部郷とする旧干潟町（現旭市）の鉄生産遺跡の数の多さは、江尻和正や藤崎芳樹によってすでに指摘されている（江尻・藤崎ほか1986）。しかし調査された遺跡がほとんどないことによりその後の研究は進展していない。
- 18 山路は東北地方の遺跡の文字資料をとりあげた。それらを以下に列記する。
- ・宮城県多賀城市山王遺跡 土師器蓋 「今」「山」「行方」の刻書 8世紀前半
  - ・福島県南相馬市泉官衙遺跡（陸奥国行方郡家）土師器椀 「今」刻書 土師器蓋「山マ」刻書
  - ・福島県南相馬市大船迫、A遺跡南地区か 土師器高台付椀 「今」土師器椀「今」刻書 土師器杯「今」刻書 土師器椀「金」刻書
- 大船迫 A遺跡は金井沢地区製鉄遺跡群の管理施設をもつ遺跡である。「金」と「今」は音読が共通することから山路は「今」の文字が製鉄と関わる資料とした。「山マ」は山部氏のことであり、山路は陸奥国行方郡の製鉄に山部氏がかかわると考察した。また金井沢地区製鉄遺跡群と行方郡家との関係を指摘した。
- 19 平川南は日本全体に分布する栗原郷について考察し、多くの栗原郷がもつ馬匹生産や牧とかかわる性格を明らかにした（平川2014）。

## 引用・参考文献

- 麻生正信・永塚俊司ほか 2000『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ－東峰御幸畑西遺跡（空港No61遺跡）』（財）千葉県文化財センター
- 阿部寿彦 1998「野毛平遺跡群」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県
- 穴澤義功 1994「古代東国の鉄生産」『古代東国の産業－那須地方の窯業と製鉄業－』栃木県立なす風土記の丘資料館
- 天野努 2020「印旛地域の郡・郷と集落－印幡・埴生両郡を中心に－」『千葉史学』第76号 千葉歴史学会
- 荒井世志紀 2010「九美上製鉄遺跡の確認調査」『香取市内発掘調査概報』香取市教育委員会
- 安間拓巳 1995「古代の鍛冶炉－その形態および鍛冶工程との関連について－」『考古学研究』第42巻2号
- 石倉亮治 2013『ふさのくに観光道路委託埋蔵文化財調査報告書－東庄町今郡カチ内遺跡・羽計清水西遺跡・橘古墳群・松ヶ根東ノ内遺跡－』（公財）千葉県教育振興財団
- 石戸啓夫ほか 1991『龍角寺尾上遺跡・龍角寺矢田川遺跡』（財）印旛郡市文化財センター
- 石戸啓夫・小牧美知枝 1997『千葉県印旛郡栄町龍角寺五斗葺瓦窯跡』（財）印旛郡市文化財センター
- 磯村亨ほか 2004『堂の下遺跡Ⅱ 中世篇』秋田県埋蔵文化財センター
- 板楠和子 1996「肥後における鍛冶・鋳物師集団の活動」『季刊 考古学』第57号 雄山閣
- 糸川道行ほか 2011『印西市曾谷窪遺跡』（財）千葉県教育振興財団
- 糸川道行 2018「下総国印旛郡言美郷を考える」『研究連絡誌』第79号（公財）千葉県教育振興財団
- 糸川道行 2019「鳴神山遺跡出土「馬牛…」墨書土器と船穂郷」『研究連絡誌』第81号（公財）千葉県教育振興財団
- 糸川道行 2020「奈良・平安時代における東総の集落と郡郷」『研究連絡誌』第83号（公財）千葉県教育振興財団
- 糸川道行 2021a「奈良・平安時代における東総の交通」『古代』第148号 早稲田大学考古学会
- 糸川道行 2021b「東総の主要集落・郡家と郡郷（上）」『研究連絡誌』第85号（公財）千葉県教育振興財団
- 糸川道行 2022「東総の主要集落・郡家と郡郷（下）」『研究連絡誌』第87号（公財）千葉県教育振興財団
- 今泉潔 1990「「瓦と建物の相克」試論－大塚前遺跡出土瓦の分析－」『研究紀要12』（財）千葉県文化財センター
- 今泉潔 1998「大塚前廃寺」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県
- 内山俊身 1998「征夷事業における軍事物資輸送について－関東の二大河水系の問題から－」『茨城県立歴史館報』25
- 内山俊身 2017「出羽元慶の乱と川戸台遺跡」『古河川戸台遺跡をめぐる諸問題』古河市歴史シンポジウム実行委員会
- 江尻和正・藤崎芳樹ほか 1986『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』千葉県教育庁文化課
- 大賀健 1987『千葉県栗原町 平山台遺跡群発掘調査報告書』平山台遺跡調査会 栗原町教育委員会
- 大道和人 2023「日本古代製鉄の考古学」『考古学ジャーナル』No.787（株）ニューサイエンス社
- 荻悦久 2003「北条塚古墳」『千葉県の歴史 資料編 考古2（弥生・古墳時代）』千葉県

- 小久貴隆史・新田浩三ほか 1995『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－一 歙田甚兵衛山北遺跡（空港No.11遺跡）』（財）千葉県文化財センター
- 加藤貴之 2008『池ノ下遺跡』（財）印旛郡市文化財センター
- 加藤貴之 2020「印旛沼東岸・西岸の古代集落」『千葉史学』第76号 千葉歴史学会
- 香取郡市文化財センター 2001「日下部Ⅱ遺跡」『事業報告Ⅹ－平成11年度－』
- 金丸誠 1990『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－成田市木戸下遺跡・富里町七栄古込遺跡』（財）千葉県文化財センター
- 神野信 2004『鉄器生産と鉄器普及』『千葉県の歴史 資料編 考古4（遺跡・遺構・遺物）』千葉県
- 川尻秋生 2003「大生部直と印波国造－古代東国史研究の一試論－」『古代東国史の基礎的研究』塙書房
- 喜多圭介 1990『ニュー東京空港ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ）野毛平木戸下遺跡ほか』（財）印旛郡市文化財センター
- 喜多裕明 2001『川栗遺跡群Ⅲ』（財）印旛郡市文化財センター
- 木原高弘 2022「酒々井地区の集落－長隈郷の特性を中心に－」『千葉史学』第76号 千葉歴史学会
- 倉田芳郎 1975・1976『千葉・干潟桜井遺跡調査概要』干潟桜井遺跡調査団
- 黒沢哲郎 2008『平成19年度成田市内遺跡発掘調査報告書』成田市教育委員会
- 小林信一ほか 1997『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ－岩山中袋遺跡（空港No.2遺跡）』（財）千葉県文化財センター
- 小林信一ほか 2005『印西市西根遺跡』（財）千葉県文化財センター
- 小牧美知枝・阿部寿彦ほか 1998『北田護台遺跡』（財）印旛郡市文化財センター
- 小牧美知枝 2002『曾谷ノ窪瓦窯跡（第2地点）』（財）印旛郡市文化財センター
- 佐久間弘行 1998「平安前期の下野・下総国界の周辺」『小山市立博物館紀要』第6号
- 佐々木義則 2012「関東における寺院・官衙の造作と鉄生産－7・8世紀の様相－」『たたら研究 第51号』たたら研究会
- 佐藤克己・沼沢豊 1973「大塚前遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』（財）千葉県都市公社
- 佐藤達雄 1996「古代末・中世の伊豆」『季刊考古学 第57号 いま、みえてきた中世の鉄』雄山閣
- 渋谷健司ほか 2001『川栗遺跡群Ⅱ』（財）印旛郡市文化財センター
- 進藤泰浩 1995『曾谷窪遺跡発掘調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター
- 鈴木圭一ほか 1995『小菅法華塚Ⅰ・Ⅱ遺跡』（財）印旛郡市文化財センター
- 田形孝一・海老原充ほか 1988『成田市畑ヶ田地区埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター
- 田形孝一 1998「畑ヶ田遺跡群」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県
- 滝口宏編 1978『木下別所廃寺第一次発掘調査概報』千葉県教育委員会・木下別所廃寺調査会
- 滝口宏編 1980a『木下別所廃寺第二次発掘調査概報』千葉県教育委員会・木下別所廃寺調査会
- 滝口宏編 1980b『曾谷ノ窪瓦窯跡発掘調査概報』千葉県教育委員会・曾谷ノ窪遺跡調査会
- 田中新史 2010「総・九十九里圏の地勢上の特性」『武射 経僧塚古墳 石棺篇 報告』早稲田大学経僧塚古墳発掘調査団
- 千葉県文化財センター 1998『千葉県埋蔵文化財分布地図（2）』
- 辻史郎 1998「木下別所廃寺」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県史料研究財団
- 戸村勝司朗 1999「タラカイⅡ遺跡」『事業報告Ⅷ－平成9年度－』（財）香取郡市文化財センター
- 戸村勝司朗 2001『長津台2号遺跡（1）』（財）香取郡市文化財センター
- 戸村勝司朗・鬼澤昭夫 2001『長津台2号遺跡（2）』（財）香取郡市文化財センター
- 鳴田浩司ほか 1992『大鯉遺跡』（財）香取郡市文化財センター
- 西川博孝 1982「成田市取香製鉄遺跡の調査」「成田市御幸畑製鉄遺跡の調査」『研究紀要7』（財）千葉県文化財センター
- 西口徹・豊田秀治ほか 2001『主要地方道成田松尾線ⅩⅣ－芝山町沖ノ台Ⅰ遺跡・沖ノ台Ⅱ遺跡－』（財）千葉県文化財センター
- 西口徹 2003『成田国際物流複合基地埋蔵文化財調査報告書2－成田市駒井野荒追遺跡 成田市台ノ田Ⅱ（2）Ⅱ遺跡－』（財）

## 千葉県文化財センター

- 新田浩三 1993『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－取香和田戸遺跡（空港No.60遺跡）』（財）千葉県文化財センター
- 新田浩三ほか 1993『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ』（財）千葉県文化財センター
- 新田浩三 1998「新東京国際空港遺跡群」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県
- 新田浩三ほか 2019『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書34』（公財）千葉県教育振興財団
- 沼澤豊 1983『下総町名木廃寺跡確認調査報告』（財）千葉県文化財センター
- 沼澤豊 1998「名木鎌部廃寺」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県
- 蜂屋孝之 1998『干潟工業団地埋蔵文化財調査報告書－干潟町諏訪山遺跡・十二殿遺跡・茄子台遺跡・桜井平遺跡－』（財）千葉県文化財センター
- 平川南 2014「古代社会と馬－東国国府と栗原郷、「馬道集団」－」『律令国郡里制の実像』下巻 吉川弘文館（初出は鈴木靖民編2012『日本古代の地域社会と周縁』吉川弘文館）
- 福岡市 2011「歴史の里 柏原を行く。」『市史だよりFukuoka』14 福岡市博物館 市史編さん室
- 福田豊彦 1995「鉄を中心にみた北方世界－海を渡った鉄」『中世の風景を読む 第一巻 蝦夷の世界と北方交易』新人物往来社
- 福田豊彦 2000「中世東国の鉄文化解明の前提」『国立歴史民俗博物館研究報告 第84集 古代における北方交流史の研究』
- 本多昭宏 2014『平成25年度千葉県旭市内遺跡発掘調査報告書 砂子山遺跡 長津台2号遺跡（第4次）』旭市教育委員会
- 本多昭宏 2016『千葉県旭市岩井安町南遺跡・岩井安町東遺跡・岩井新田遺跡・岩井番匠山遺跡』（財）東総文化財センター 旭市教育委員会
- 松井和幸 2022『鉄の日本史 邪馬台国から八幡製鐵所開所まで』筑摩書房（筑摩選書）
- 村上伸二 2000『金平遺跡Ⅱ』嵐山町遺跡調査会
- 山崎純男 1988『柏原遺跡群Ⅵ－古墳・古代遺跡M遺跡の調査－』福岡市教育委員会
- 山路直充 2014a「陸奥国への運穀と多賀城の創建」『日本古代の国家と王権・社会』塙書房
- 山路直充 2014b「下総国の郡・郷・里・駅家」『市川市史編さん事業調査報告書 下総国戸籍 遺跡編』市川市文化国際部文化振興課
- 吉田東伍 1903『増補 大日本地名辞書 第六巻 坂東』富山房（三版1976）

